

『狂歌百物語』にみる江戸時代後期の立山観

奥澤 真一郎

はじめに

立山は、古くより富士山・白山と並ぶ「三霊山」の1つとして、全国的に知られていた。その立山には「地獄」と「極楽浄土」が同時に存在し、特に地獄の景観や平安時代以降、盛んに編纂された説話集などにある立山地獄の描写は当時の人々に大きなインパクトを与え、以後の日本人の思想形成にまでも大きな影響を与えたということも言うまでもない。

特に平安末期に編纂された『今昔物語集』には、立山を舞台とする説話が5話あり、そのうち立山地獄に墮した人が、仏法の力によって救済されるという話が3話、立山に参詣して祈請あるいは修練したことを記した話が2話ある。¹⁾ また、室町時代に成立した謡曲『善知鳥』は、世阿弥の作といわれ「立山へ行けば死者に会って話ができる」、「霊との交信ができる」という、「立山地獄説話」に「津軽の珍鳥伝説」さらにその2つの伝承を結びつけている「片袖幽霊譚」など、前時代からの伝承をベースに巧みに描かれている名作である。²⁾

ところで平成20（2008）年に京極夏彦・多田克美編著『妖怪画本 狂歌百物語』（以下、『妖怪画本』とする）が、国書刊行会から出版された。底本は嘉永6（1853）年刊『狂歌百物語』であるが、この本は96種の妖怪や怪奇現象などを兼題として、集

った狂歌を挿絵とともに掲載した狂歌集である。前掲『妖怪画本』は収録されているすべての狂歌の翻刻や挿絵および兼題について、解説を加えた労作である。

この『狂歌百物語』の中には兼題として、「立山」が取り上げられている。本稿ではこの『狂歌百物語』にある「立山」を兼題とした狂歌について具体的に検討し、古代から近世に受け継がれてきた「立山地獄伝承」の思想をふまえて、特に近世後期の江戸の人々がそれをどのように受け止め、理解してきたのかということ、検討してみたいと考える。



写真①『狂歌百物語』兼題「立山」の挿絵
（富山大学付属図書館蔵）

1. 富山大学ヘルン文庫所蔵本について

嘉永6年刊の『狂歌百物語』は全8編からなり、国会図書館をはじめ諸本が確認されているが、そのうちの1つが上編・中編・下編3冊にまとめられ、8編すべて揃って富山大学付属図書館のヘルン文庫に収められている。今回、同大学付属図書館のご協

力を得て、調査をさせていただくことができた。

このヘルン文庫については、大正13（1924）年に開学した旧制富山高等学校（現富山大学）の初代校長、南日恒太郎氏が、実弟であり小泉八雲の高弟でもあった田部隆次氏から、小泉家が関東大震災の影

響で、故八雲の蔵書の維持管理に危惧を感じ、譲渡の意向をもっていることを聞き、同書の購入の意志を表したことに始まる。購入資金は東岩瀬町の馬場はる氏が提供し購入した蔵書を同校の開校記念に寄贈して、ヘルン文庫となったものである。⁴¹馬場氏は江戸時代からの北前船交易や、それによる魚肥（鯨）の販売で財をなした、いわゆる地方財閥で、歴代の当主は貴族院議員を勤めた。

さてヘルン文庫所蔵『狂歌百物語』であるが、主な内容は以下のとおりである。

表紙	鶯色、無地、縦22.0cm×横15.5cm
題簽	左肩に貼題簽。無枠白地に「狂歌百物語 上編」、「狂歌百物語 中編」、「狂歌百物語 下編」
編著者	天明老人尽語楼
挿絵	竜斎閑人正澄
奥付	なし
蔵書印	「蟹のや印」・「小泉八雲」
なお保存状態はさわめて良好で、史料的价值も非	

常に高いと考えられる。

この『狂歌百物語』について、小泉八雲は非常に興味を持ったらしく、特に気に入った48首をとりあげて英訳し、『ゴブリン・ポエトリー』という題で出版した。⁴²さらにその著書は、小泉八雲の実子である小泉一雄氏によって、八雲没後30年を記念して昭和9（1934）年に『小泉八雲秘稿畫本 妖魔詩話』（以下『妖魔詩話』とする）という題で、邦文解説も併せて、上梓されている。また物理学者で随筆家の寺田寅彦が、この『妖魔詩話』に関して、書評を書いている。その中で、寺田はヘルン文庫蔵の『狂歌百物語』について、小泉八雲氏の夫人が古本屋から掘り出してきたといったエピソードも紹介している。⁴³

蔵書印については、「蟹のや印」と「小泉八雲」印の2つがある。このうち、「蟹のや印」に関しては、おそらく江戸時代の貸本屋の蔵書印であろうかとも思われるが、残念ながら具体的な情報を持ち合わせていない。是非とも、ご教示を賜りたい。

2. 「狂歌」と「百物語」について

狂歌については言うまでもないが、近世中期から後期にかけて、下級武士から町人らが中心となって、江戸で大流行した「三十一文字」の文芸である。天明初（1781）年までには、当代の人気役者、歌舞伎役者、また公許の遊里新吉原の関係者ら、さらには旗本等、高位の武士や大名家の子弟までをも巻き込んだ一大流行となって、数々の作品が生み出された。⁴⁴このころの狂歌は、後にその作風から「天明調」とか「天明狂歌」といわれるようになった。

しかし寛政期以降になると、これらの江戸を発祥とする文芸は、松平定信による一連の改革のために壊滅的な打撃を受ける。その後は筆を折る者も現れるなど、かつてのような勢いは見られず衰退し、現代に至っては川柳の隆盛と比べて、ほとんど詠まれることはなくなってしまっている。その中で『狂歌百物語』は幕末の嘉永6（1853）年刊行で、四角園

草翁の跋文にも「天明の古つゝらを聞き、題号となし・・・」とあるように、すでに流行が廃れて久しい時期の刊行ではあるが、大作であり狂歌界が放った最後の一花といえるだろう。

天明狂歌が大衆化するにつれて、高点を競い合う狂歌合や、その成果を示した番付の刊行といった遊戯的な催しが盛んに行われるようになる。すなわち、不特定多数の人々を対象としてチラシ等で配布した兼題によって入花を募り高点を競わせ、その得点によって参加者を配列した番付とその狂歌をまとめた本を刊行するという運営形態が成立していくのである。⁴⁵

一方、跋文中に「ぬば玉の闇に百怪を語れは、其験有とかや・・・」とあるように、百物語とはもともと怪談会の形式の1つであり、行灯に100本の灯心を入れて怪談を語り合い、1話終わる毎に1灯を

消し、語り終わって真っ暗になったときに妖怪が現れるという俗説にもとづくおなじみの遊びである。狂歌の座を開くことと、百物語の座を開くこととい

う江戸の人々が好んだ2つの催しが次第に融合していったのは、ごく自然なことであろう。

3. 天明老人尽語楼について

天明老人尽語楼は天明元（1761）年江戸に生まれた。四世絵馬屋額輔の著による『狂歌人物誌』⁸¹では次のように紹介しているので、天明老人に関する部分を引用する。

天明入道は天明老人とも呼べり。姓は小間切氏にして、通称を甚五郎といふ。元来大工なりしが、狂歌を好みて、はやく天明の頃より当時有名の狂歌師と交り、狂名を下手内匠といひ、別号を尽語楼また飛弾山人といへり

むさし野、月はむかしにかはらやの

から草を出てから草にいる

この歌は尤も得意の吟にして、人も評せし秀詠也。嘉永安政の頃を盛にして、山城河岸の香以（注、細木香以）に愛され、日本橋箱屋町の庵に狂歌指南所といふ看板を掲げて、社中を小槌側といひ、あまたの門人を取立て狂歌をもて一種の業とせしこと昔より狂歌堂真顔とこの天明

老人の二人とす。当時初代立斎広重も天明入道に就て狂歌を詠し故、著書は多く広重の画を用ひたり。文久元年五月十四日没す。享年八十一歳。・・・以下略・・・（句読点、注意書きは筆者による）

これによると、天明老人尽語楼は、歌川広重をはじめとして、数多くの門人をかかえ、狂歌指南を生業としていたようである。さらに判者もしくは催主として兼題を提示し、入花料をとって作品を一般公募し、選んだ秀作をもとに摺物や歌集を刊行していたようである。また『狂歌江都名所図絵』⁸²などの狂歌集も自ら編者となって刊行し、当時の狂歌界における第一人者としての地位を確立していた。狂歌史的に見れば最後に当たる時代に成立した『狂歌百物語』がこれだけの大作に仕上がったのは、尽語楼の力量によるところが大きいであろう。

4. 「狂歌百物語」の内容について

さて『狂歌百物語』の内容について述べることにする。まず序文・跋文の翻刻を以下にとりあげる。

序文

幽霊に時代世話をわかちたるは、鶉衣の作者の恐ろしき働きにして、狂霊に男女の情牀をしわけたるは戸板返し、俳優（わざおぎ）の骨折、そつとするしうちになん。その狂文は一幕の戯

場（かぶき）に等しければ、狂歌又萬物の鸚鵡石なるへきと。此頃小槌座の太夫元、題摺の役割を出して、百物語の續き、狂言を興行するに、賣出しの達者たち、兼題の役不足をいはず、出精の新詠に妙案の工夫をこらす事、梅光いまた（だ）巧みを尽さず、南北かつて筆を立さるの所、實に作者の苦心すこ（ご）いものと謂いつへし。されは（ば）打出し満尾のシヤギリ迄、

人魂の呼、糸引き切らすしかけ、焔煙の立消えせず、ドロドロの大入疑ひなしと、先づ蓋明た初日から先を見越之入道に代つて、其為口上述る者は、何廻舎のあるじ香以山人。

□□道人書

玉くしけ、箱根向ふより仕入れ持参し、お化の荷物、蓋明けわたる天とうほし。てんとう任せの並へみせ。船幽霊の竹柄杓、お菊のかそへる皿せはち、ろくろ首の衣紋竹、文福茶釜の茶ほうじ迄、天明風と文政風俗、何でもかてもよみ取見取、三十一字の点の安賣、も、んち、いの評判、評判

(打出の小槌の朱印)

跋文

ぬば玉の闇に百怪を語れば、其験有とかや。爰に蜀山の門より出たる尽語老人、大入道と化してそこに顕れ、閑(か)しここに顕れ、何の集会にも洩ることあらざりけり。然るに文政の頃箱根向より野夫(暮)けもの来り、八街に跨り良もすれは高けり。けんつるし、と叫ぶ其聲□□窩に等しく、聞きわけ難きに似たり。是か為に滑稽暫く怠りにたるを、飛弾内匠、工(たく)みをまうけ、天明の古つゞらを開き題号となし真生戯咲歌の集会を催□、すみか営みしも、かのけもの、八畳敷にたらぬ洞穴、あなおかし、穴面白と、こはい物見たしにはあらで、入道どもとちからを合せ、終日夜すがら披口の聲、驚しく賑に、化物屋敷の店員斗。されど狂歌の躰復古一変せしのみならず、八編迄乃連続、大切とやいはん。大鵬とやいはむ天明老人、ひとつ穴のむじな、狸の毛(筆のこと)を持て誌す。

嘉永六とせ乃冬 武蔵野之奥 四角園
 艸加乃里ニ隠住 草翁

()内は筆者補足。一部判読できない文字があった。

「妖怪画本」版の翻刻では序文の筆者を「竜斎道人」としているが、筆の運びから見て、「竜斎」とは判読できないと考えた。

ところで、「此頃小槌座の太夫元、題摺の役割を出して、百物語の續き、狂言を興行するに・・・」とか、「飛弾内匠工みをまうけ、天明の古つゞらを開き題号となし、真生戯咲歌の集会を催□、すみか営みしも・・・中略・・・入道どもとちからを合せ、終日夜すがら披口の聲、驚しく賑に、化物屋敷の店員斗」とあることから、狂歌師が一堂に会して狂歌を読む座が設けられていたことが想像される。また序文の「狂歌又萬物の鸚鵡石なるへきと・・・」とか、跋文にも「真生戯咲歌の集会を催□、すみか営みしも・・・」とあるように、狂歌そのものの特質として、それらが古典などの伝統や意匠を踏まえつつ、打てば響く鸚鵡石のように、当時の流行や世相に敏感に反応して創られる文芸であることを示している。

ところで前述のように『狂歌百物語』は8編から成り立っている。1編につき、12の兼題が出されており、合計96の兼題が出されている。それに応じた高点をとったであろう、挿絵中とまた各編の末尾にまとめて掲載されている各首の狂歌という構成になっている。

兼題については、「見越入道」(初編)、「轆轤首」「皿屋敷」「雪女」(いずれも2編)、「四谷於岩」(5編)、「のっぺらぼう」(8編)などおなじみの妖怪がほとんどであるが、中には「古戦場」(3編)、「一寸法師」(6編)、「羅生門」(8編)など必ずしも妖怪ばかりが取り上げられているわけではない。「立山」は第7編の2番目に登場している。

5. 『狂歌百物語』にみる「立山」

兼題「立山」について見ると、まず挿絵(写真①)の右上には地獄谷を象徴すると思われる、地面から

立ち上る炎と、その上に人の形をした靈魂が飛び交うという「立山へ行けば死者に会って話ができる」

「山中他界観」といった、従来からの伝承をモチーフとする絵が見られる。また左側は、立山の険阻な登拝路をひたすら登りゆく修験者といった、これもまた従来からの立山は「修験の山」といったイメージそのままの絵が見られる。

狂歌は挿絵中に14首、巻末にある「越中立山」という項目に23首（写真②）、合計37首が掲載されている。（ただし、1首は重複している）

別表1（巻末別表1参照）は、37首すべての狂歌と関連する語句や伝承、慣用句などをまとめたものである。また狂歌各首には、便宜上、通し番号を付けた。

まずNo21の狂歌をここにあげる。

「雪女かとも越路の立山を

ちらりちらりと凄き幽霊」

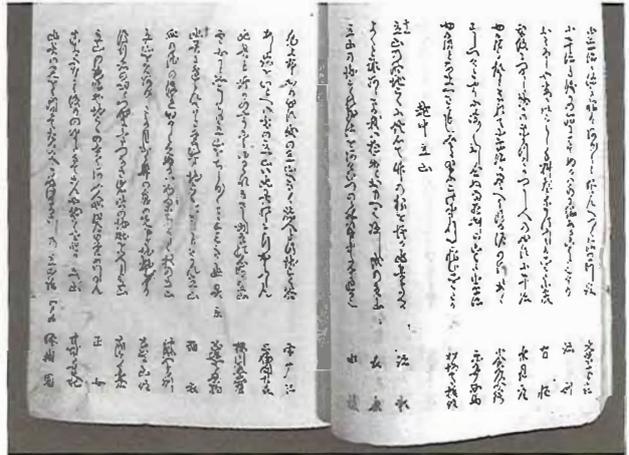
この狂歌にある「み+越路」という表現は『万葉集』に見られる、地名に接頭語「み」をつけた用法である。「み」という接頭語は、本来霊的な力がこもるとされるものに接続する語であるという¹⁰⁾。狂歌のもついわゆる「箱庭」の要素が内包された一首であろうか。

まず狂歌師の出身地を順に見てみる。地名が表記してあるものしか判明しないが、草加、駿府、下毛（野）、京、江戸崎といったように、関東を中心に広い範囲にわたっていることが分かる。おそらくこれらの狂歌師は、実際に立山に登ったことはもちろん、見たこともないであろう。それにもかかわらず、これらの狂歌を詠み、かつ歌意を理解できるということは、やはりこの時代の人々の「立山」に対する認識は、共通のものがあつたのだろう。

もっとも近世後期は芦峠寺の宿坊によって、全国的に廻檀配札活動が行われていた時期であり、江戸においても吉祥坊や宝泉坊などによって、廻檀配札活動が盛んに行われ、これらの宿坊の衆徒は毎年農閑期に江戸に赴き、同地で数カ月滞在し、立山信仰を布教していたことが、福江充氏の研究で明らかにされている。¹¹⁾

また芦峠寺一山会所蔵の嘉永6年、宝泉坊泰音に

よる江戸の檀那帳や、万延元年の吉祥坊の江戸檀那帳なども現存していることから¹²⁾、天明老人尽語楼らが活躍した同時期に、江戸日本橋など中心部において、衆徒たちによって布教が行われ、江戸の人々にもかなり立山信仰が認知されていたのではないかと考えられる。今後江戸における衆徒たちの廻檀配札活動がさらに解明されることが期待される。



写真②「越中立山」（富山大学付属図書館蔵）

さて、ここに掲載されている狂歌のほとんどは幽霊や地獄をあつかったものである。特に地獄に関しては、紺屋地獄、油屋地獄、針の山、火車、血の池など立山山中にあり、立山信仰にもゆかりの深い地獄の名称が取り上げられている。これら地獄の名称の多くは平安期の『往生要集』に取り上げられている名称で、他の霊山とされた山にもみられるものであり、それ自体は決して珍しいものではない。しかし近世後期になって、このように「立山山中の地獄」として、個々の名称が江戸の人々に知られるようになったのも、立山衆徒たちの廻檀配札活動の結果だと考えられないか。

別表2（巻末別表2参照）は、近世後期の越中に関する紀行文などの作品に見られる、個々の地獄の名称を示したものである。出板文化の発展などの理由もあるだろうが、やはり近世後期になって、盛んに立山地獄の名称が記されるようになっていく。むしろ人々の地獄に対するイメージは、漠然としていた従来に比べて、実際に目にした人も増えて、より

具体性を帯びて来たのではなかろうか。

一方で、そのような伝承を鵜呑みにしないのが当時の江戸の人々で、No 1、6、7、9、10、14、17、22などの歌はまさに「地獄の沙汰も金次第」を地でいくような歌である¹³⁾。

この点については、19世紀の江戸の世間話として、立山の偽幽霊と恋に落ちて妻に迎えた両国橋近くの板木彫り職人の情話がしばしば取り上げられたという¹³⁾。

その他、たとえばNo 5の狂歌を以下にあげる。

「なき人に逢ふも宜なり魂反す
薬売り出る越の立山」

これは「立山伝承」の「立山へ行けば死者に会って話ができる」とか、「越中売薬」「反魂丹」「反魂香」などのエッセンスが狂歌に込められているが、当時、芦畔寺衆徒が江戸で廻壇配札活動を行う際に

同時に反魂丹を頒布していたという事実があることから¹⁴⁾、成立した狂歌ではないかと考えると、非常に興味深い。あくまで推測に過ぎないが、そういった点からも当時の江戸の人々にとって立山信仰は、当時の人々の日常生活の一部として、かなり浸透していたことが伺えるのではないだろうか。

狂歌は元々「粹」と「穿ち」を旨とする江戸根生の文芸であるので¹⁵⁾、詠み人はもちろん、狂歌の愛好者すべてにとってこれらのエッセンスは「知っていて当然」「知らなければ野暮」といったたぐいのことであっただろう。関東から京都までの広い範囲に立山信仰が広まり人々の意識の中に定着し、それを土台として狂歌という江戸を発祥とする文芸の中に、融合していったということがいえるのではないだろうか。

おわりに

今まで見てきたように、「立山地獄伝承」は文芸作品のテーマとなって、江戸の人々の心に生きていたことがわかった。

残念ながら、今回は狂歌に対する分析は全く不十分で、『狂歌百物語』の成立背景などもほとんど把握できていない。不備な点をお詫びし、今後の研究課題としなければならない。

ともすれば、江戸後期の文学は「立山地獄伝承」を茶化した作品が多いとされる。確かにそのような点がみられるが、「立山」が狂歌の兼題になったり、有名な『金草鞋』や『越中楯山幽霊邑讐討』をはじめ、他の戯作文学の中で度々、話題とされたりしているのは、単に茶化しの面白みだけで説明しきれないのではないか。江戸時代、特に都市部においては、儒学や自然科学などの学問が発達した反面、仏教色

が薄まって地獄や幽霊の存在が否定されつつあったとしても、人々の心の中ではその存在を完全に否定しきれず、人間の力ではどうにもならない、理解の範疇を越えた何物かの存在を無意識のうちに感じていたのではないだろうか。それだからこそ、妖怪や「立山」などの恐ろしい物が、次第に江戸の町人文化にもまれて洗練されていき、人々の共通の認識の中で、面白みが感じられる話題となっていくのではなかろうか。ともかく今回は単なる話題提供で終わってしまったが今後とも江戸時代の戯作文学における「立山観」について研究していく必要がある。

最後に兼題「鬢気楼」にみられる、越中に関する狂歌を紹介する。

「月の貝ありその海の蛤は

ふくや高殿不老門めく」 綾のや¹⁶⁾

謝 辞

本稿の執筆に当たって、富山大学附属中央図書館図書館情報グループ主幹、栗林裕子氏をはじめ図書館職員の方々には、突然の調査申し込みにもかかわらず、格別のご配慮をいただいた。また、『狂歌百

物語』の翻刻に当たっては、富山県〔立山博物館〕学芸課職員の協力を仰いだ。紙面をお借りして、ここに厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 『富山県史』（通史編Ⅰ原始・古代）996頁
- 2) 米原寛「文学にみる古代・中世の地獄思想と立山」（『研究紀要』、富山県〔立山博物館〕Vol.16、2009年所収）
- 3) 『富山県史』（通史編Ⅵ近代下）534頁
- 4) 京極夏彦・多田克己編『妖怪画本狂歌百物語』274頁、国書刊行会、2008年
- 5) 寺田寅彦『小泉八雲秘稿画本「妖魔詩話」』（『寺田寅彦全集』第17巻所収、岩波書店、1962年）
- 6) 小林ふみ子『天明狂歌研究』汲古書店、2009年
- 7) 小林前掲書
- 8) 「狂歌人物誌」（江戸狂歌本選集刊行会『江戸狂歌本選集』第15巻、東京堂出版、2007年）
- 9) 江戸狂歌本選集刊行会『江戸狂歌本選集』第13巻、東京堂出版、2004年所収
- 10) 前掲『富山県史』716頁
- 11) 福江充『立山信仰と立山曼荼羅』第9章「近世幕末期の江戸における立山信仰」
- 12) 福江前掲書
- 13) 堤邦彦『江戸の怪異譚』132頁、べりかん社、2004年
また、作家の田中貢太郎（1880～1941）が『立山の亡者宿』を發表している。亡き妻に逢いに江戸から立山へ行った主人公だが、立山で見た妻の幽霊は、宿の主人が雇った女性が扮していたものだった。主人公はその女性を江戸に連れ帰り、後妻とするというあらすじである。近世後期の江戸における立山の伝承
- 14) 福江前掲書 255頁
「売薬反魂丹の頒布」
- 15) 前掲『妖怪画本狂歌百物語』316頁。「穿つ」とは『広辞苑』によれば、①普通には知られていない裏の事情を暴くこと。人情の機敏など微妙な点を巧みに言い表すこと。②新奇で、凝ったことをすることとある。
- 16) ありその海：富山湾であろう。魚津の海か。
蛤：昔は大蛤が吐く気によって空中に楼台が現れると考えられた。
高殿（楼）：高く作った楼
不老門：中国の洛陽の門のひとつ

別表1 『狂歌百物語』所収の狂歌について

兼題 立山

挿絵中の狂歌					
No.	上の句	下の句	狂歌師	狂歌と関連する語句	備考
1	やとはれて 成る立山の 幽霊に	足を添ふれば いく度も出る	草加 四角園		草加四角園は、『狂歌百物語』の跋文を書く 四角園草翁
2	立山に 見る幽霊の 白袴	紺屋地獄に 落ちし人も	弥生庵	立山に行けば死んだ人に会える 紺屋の白袴・紺屋地獄 死装束	弥生庵雑群：文化10（1813）年～慶応3（1867）年。江戸 出身。細木香以に愛され、その父桃江園雑亀より弥生庵3 代を許される。巴水迹の判者。
3	立山の 獄に出でる 幽霊は	宜こそ越の 中つ国なれ	駿府 松径舎		松径舎：生没年不詳。江戸時代後期の俳人
4	ちり松葉 幽霊谷に つもりては	針の山なす 越の立山	宝市亭	松の葉 針山地獄	宝市亭：黄金升成（生没年不明）江戸時代後期の狂歌師。 上総の人。江戸日本橋で料理屋を営む。
5	亡き人に 逢ふも宜なり 魂反す	葉売り出る 越の立山	下毛葉庵 壺蝶庵花好	立山に行けば死んだ人に会える 反魂丹 越中売葉	庵枝大葉：まばらな枝と大きな葉。文章を書くのに細かな 規則にとらわれないで伸び伸びと筆をふるうことの例え
6	ふところの 火の車なる くぐつ女も	幽霊にとて 雇ふ立山	文語楼青松	火車 火の車 くぐつ女	
7	打ち鳴らす 鐘次第にて 立山の	地獄の沙汰を 語る修行者	宝遊子升友	鐘 地獄の沙汰も金次	
8	下満の かりやす坂も うちすぎて	紺屋地獄も 語る旅人	弓のや	かりやす 紺屋地獄	かりやす：イネ科の多年草。山地に群生し、高さ約1メートル。葉は広線形。 秋、莖の頂に枝分かれした穂を出す。古くから黄色染料に使用。季語 秋 弓の屋春兄（はるえ）：文政10（1827）年～明治30（1897）年。 江戸日本橋に住む。本名は諸岡祐輔。
9	立山の 地獄を廻る 案内者に	酒代をやれば 地蔵顔せり	神風や青則		
10	染め賃を 取れば紺屋の 地獄にて	あつらへ向きの 幽霊を出す	芝口や	紺屋地獄 あつらえ	
11	立山の 地獄の道の 案内衆は	岡目に見ては 凄き世渡り	東風のや		
12	亡き人に ふたたび逢ふて 立山に	思ひのむねも 燃ゆる小地獄	文昌堂尚丸	小地獄 立山に行けば死んだ人に会える	
13	ふんどしの 名の越中の 物かたり	金はちちみて そふ毛立山	五息齋無事也	越中ふんどし 金草鞋 総毛立つ	そうげだ・つ【総毛立つ】 〔「そうげだつ」とも〕恐ろしくて、全身に鳥肌が立つ。身の毛がよ だつ。
14	やとはれて 出る幽霊は 立山に	足を元手の 細き世渡り	芝口や	足（幽霊・お金）を連想	

越中立山(巻末に所収の狂歌)					
No.	上の句	下の句	狂歌師	狂歌と関連する語句	備考
15	立山の 油地獄に 燈心で	竹の根を握る 幽霊を見る	跡頼	石女地獄(煤燭の芯で竹の根を握る) 油屋地獄	右上に「十二」と漢数字あり
16	欲と罪 あらざる我は 極楽と	思へば涼し 越の立山	喜楽		喜楽：?～元治元(1864)年。初代尾上松寿。江戸末期の歌舞伎役者。天保10～安政3年以降に活躍。
17	立山の 地獄の沙汰を 明け六ツの	全次第にて 見に廻る也	水穂	明け六の鐘(全) 地獄の沙汰も全次第	
18	鬼上布 織り出す越の 立山へ	きく旅人も 行く地獄谷	雪麻呂	上布(縞模様) 虎の皮のふんどし	上布(じょうふ)は、細い麻糸を平織りしてできる、ざらざらした張りのある上等な麻織物。縞や縞模様が多く、夏用和服に使われる。雪麻呂(啓):享和2(1802)～明治14(1881)年。
19	足跡を いとへば雪の 立山は	幽霊のみぞ 行き通ふらん	三輪園甘喜	幽霊に足はない おしまり山	
20	幽霊も 煙のように 見ゆるかな	刻み煙草の 名ある立山	櫻川慈悲有		
21	雪女 かとも越路の 立山を	ちりちりと 凄き幽霊	京 花遊亭春駒	み越路：見越路・み十越路	万葉集に、用法がある。地名に「み」をつけた用例は「み熊野」、「み吉野」など3つのみ接頭語「み」は霊的な力があるとされるものに接続するという。
22	幽霊に 逢い見ん事も 全次第	地獄の沙汰も きかん立山	羽衣	地獄の沙汰も全次第	右上に「十」と漢数字あり
23	血の池の 流れ出でると 見えぬは	紅葉散り寂く 秋の立山	神風や青則	血の池地獄	
24	立山を 見歩く 見る目喰ぐ鼻の	鼻の先にも 地獄ありけり	吉野山住	見る目喰ぐ鼻：地獄の閻魔の庁の人頭幢(にんずどう)。幢(はたほこ)の上に男女の首をのせたもので、亡者の善悪を判断するという。	
25	修行者の ひとつ咄に ふたつ泣き	娑婆の地獄を 見しと立山	大内亭参臺	娑婆の地獄：この世の地獄	
26	立山の 鍛冶屋地獄の 責めにあう	人や非道の 金のばしけん	正女	鍛冶屋地獄	
27	真青に 鴨海絞りの 浴衣着て	紺屋地獄を 廻る立山	甘州亭甘記	鴨海絞り 紺屋地獄	鴨海絞り：江戸時代に絞り染め生産の中心は有松地域であったが、正式な宿場でない有松には旅人は停留せず、東海道五十三次の一つであった鴨海宿においても販売を行ったことから、有松絞りも江戸では専ら「鴨海絞り」と呼ばれていた。
28	幽霊の 足を見つけて 旅人も	ぬけさる越の 立山詣	江戸崎 緑樹園	足ぬけ	江戸崎は現在の茨城県にある。緑樹園元有：?～文久元(1861)年。
29	立山の 地獄こわしと たふさきの	越中締めて かかる旅人	五葉園松蔭	越中ふんどし ふんどしを締めてかかる(気持ちを引き締めて事に当たる)	たふさき(鬚鼻禪)：ふんどし 五葉園松蔭：文政7(1824)～明治27(1894)年
30	おそろしき 廻国咄し 下帯の	緒につけし 越中立山	西馬 (楽亭西馬?)	下帯の緒 緒に就く：物事の見通しが就いて、事に当たる	志倉(楽亭)西馬：文化5(1808)～安政5(1858)。上野出身。

No.	上の句	下の句	狂歌師	狂歌と関連する語句	備考
31	下満の かりやす坂も うちすぎて	紺屋地獄も 詣る旅人	綾乃屋		8と同じ歌。ただし8の狂歌師は弓のやになっている
32	稗栗の 針をもふみて 登りけり	地獄へ廻る 秋の立山	水々亭樗星	稗栗 針の山地獄	
33	蓮華草 仏の座まで咲 き出する	いかで地獄の あなる立山	全	蓮華草 仏の座	
34	立山の 幽霊村の 荒れ鼠	地獄落としを 懸けてこそとれ	菊好	地獄落(と)し:ネズミ取りの一種。 餌に食いつくと、上から重い板が落 ちてきて打ち殺す仕掛け。 幽霊村:越中樞山幽霊邑警討(文 化4・1807年)、十返舎一九の作	
35	日送りに 時雨なしつつ 立(山)の	紺屋地獄の 木々の満村	駿府 芝人	日送り 紺屋地獄	時雨:秋末から冬にかけてバラバラと通り雨のように降る雨 上の句、立山の「山」が脱字となっている
36	立山の 油地獄を 見下ろして	己(おの)が 身内の 汗も絞りつ	花林亭糸道	油屋地獄 油を絞る	
37	幻に 見ゆる姿は 亡き親に	あい宿もなき 立山地獄	桃本	みあい宿:逢い宿・相宿	桃江園雑亀:~安政3(1856)年。江戸の富豪。狂歌は弥生庵 雑丸に師事し、桃の本の号を譲られた。細木香以は実子。

嘉永6年刊『狂歌百物語』より作成

表中の狂歌師の略歴については以下の文献を元に作成した。

『新訂増補 人物レファレンス辞典 古代・中世・近世編Ⅱ(1996~2006)あ~す』『同 せ~わ』、2007年、日外アソシエーツ編集部、日外アソシエーツ株式会社

『講談社日本人名大辞典』、2001年、上田正昭ほか監修、講談社

別表2 近世後期の主な紀行文などに見られる地獄の名称

作品名	著者	成立年	作品内に見られる地獄
立山紀行	佐藤季昌	寛政10(1798)年	叫喚、焦熱、阿鼻（凡ては一百三十六） 血の池
越中道の記 (五ヶ山大牧入湯道之記)	作者未詳	天保12(1841)年	八寒地獄、髑地獄、等活、油屋、紺屋、 室屋、焦熱、百姓、鍛冶屋、(八大地獄) 十六宛別所小地獄、血ノ池、八寒地獄
立山ノ記	野崎雅明	文化9(1812)年	血の池
日本九峯修行日記	野田泉光院	文化12(1815)年	糞屋、紺屋、鍛冶屋、鑄物師、酒屋、百姓、 無間、叫喚、血の池、タタラ
三の山巡	尾張藩士某	文政6(1823)年	血ノ池、紺屋地獄、米屋、鍛冶屋、密婦
立山手引草	未詳	嘉永7(1854)年	耐寒・等括・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・ 焦熱・大焦熱・無間・(別所地獄) 血の池・双婦・不産女
越中旧事記	未詳	未詳	八大地獄(各十六別所あり) 血池
越中遊覧志	竹中邦香	明治18(1885)年	叫喚、無間、八幡、等活、阿鼻、焦熱(八大) 紺屋・鍛冶屋・団子屋・油屋・百姓

凡例

この表は、以下の著書をもとに作成した。

- 立山紀行 『喚起泉達録 越中奇談集 越中修正11』所収、桂書房、2003年
越中道の記 『山岳宗教史研究17 修験道史料集〔I〕』543頁、五来重編、名著出版、1983年
立山ノ記 『喚起泉達録 越中奇談集 越中修正11』所収、桂書房、2003年
日本九峯修行日記 『喚起泉達録 越中奇談集 越中修正11』所収、桂書房、2003年
三の山巡 加藤基樹 『「三禪定」考一成立と『三の山巡』にみる実態』
(『研究紀要』(富山県立立山博物館)vol18所収、2010年)
立山手引草 『「立山曼荼羅を聴く」—絵解きの世界』富山県立立山博物館、1995年
越中旧事記 成立年。作者未詳、富山県立図書館蔵
越中遊覧志 竹中邦香著、廣瀬誠編、言叢社、1983年